ニューヨーク補習授業校だより

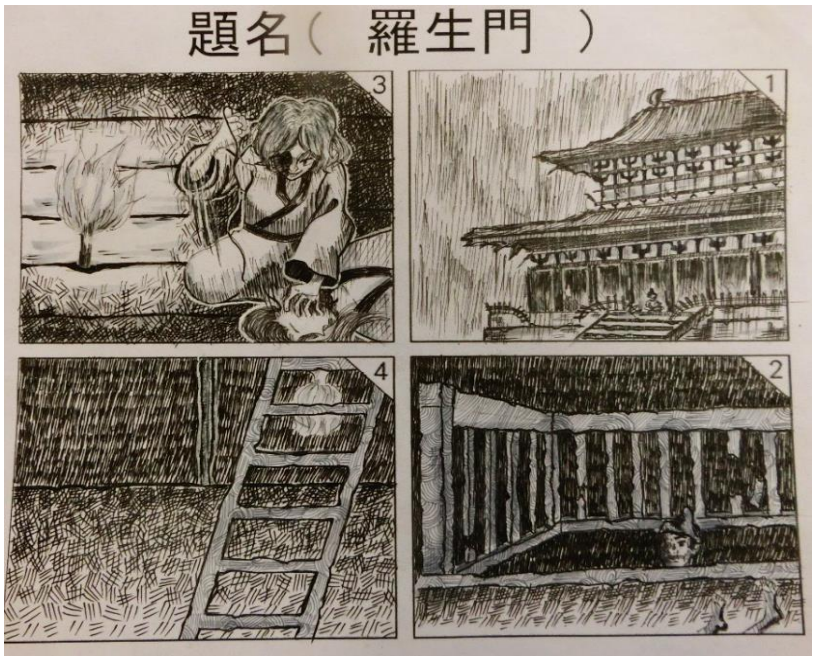
平成２９年度　第２１号
校　長　　青木　正彦

＜自分の考えをもとう。そして日本語で表現しよう！その３「国語」＞

生徒作品A

　国語の授業は、ある作品をクラスメートと一緒に読む機会であることに、大きな意味がある。読書は一人でもできるが、その作品の世界にも、文章に表された考えにも、いろいろな反応があり得る。
　クラスは様々な感想や意見が表明され交換される場であり、そこでの交流を通して、広い視野を持ち、互いを深く理解し、人を思いやる自分へと変わっていくことができる。
　一つの単元を授業で扱う時間は限られている。従来の授業では、そのほとんどを精読に費やしてきた。しかし、現在要求されている能力は、思考力と想像力を行使しながら、虚構の世界が可能とする人間体験を得て、それを表現することのできる力である。
　「理解」「思考」「表現」「交流」が、人として成長するために不可欠なのである。
　今回の授業では、同じ作品なのに、イメージや印象が随分違うということが、絵の助けもあり、明確に伝わった。交流場面は、大変興味深く、実に楽しいものであった。

　７月８日、LI校高等部１年の教室で行われた国語の授業は、「羅生門」であった。
　「印象に残った場面は、悪を悪で倒す場面です。老婆を倒すのは、生きるための善だった･･･。」
「印象的だった場面は、老婆が死骸から髪の毛を抜いている場面でした･･･。」
「下人が自分の人生をどう生きるかを決めたところ。老婆を蹴り倒した場面でした･･･。」
「物語が始まる前の羅生門や景色の説明、妖しい雰囲気でした･･･」等。
　それぞれの生徒が印象に残った場面を、スマートボードに映っている自分の書いた4コマ漫画を前に、発表していく形でこの授業は始まった。
　純日本文学のおもしろさを体得し、本文からの読み取りを通して、思考力と想像力を鍛えるのが授業のねらいである。
　授業では、小説の時代背景に触れた後、各場面で下人の心理の動きを把握し、暗示的な結末に至るまでの必然性を追う。さらに生徒は、その後の下人の人生について思いをめぐらせた。



生徒作品B